

検証

崩拓銀

<3>10.10.21

部のイメージに重なった。

その一年前、札幌に進出していた東京の不動産デベロッパー「塚本産業」の古谷一通社長に、取引のあった拓銀薄野支店の支店長が持ちかけた。「うちの北海道に会ってくれないか」

古谷は一度は「本店と付き合おうとは思わない。支店で十分だ」と断った。だが、説得され、札幌の料亭で海道と初めて対面。古谷には海道が「型破りで面白い人物」に映った。それを機に塚本産業は拓銀との関係を深めることに

総合開発部

部の一角には担当役員個人の室があった。そこに座ったのは海道弘司常務。十億円以上の新規融資を取れ、一億二億は支店に任せろ。前任の本部長時代の派手な癖(けき)は有名だった。積極的、行動的な性格は、そのまま新しい北海道エスター…。後に総合



マスコット

キャラクターの親しみあふれる笑顔は、道民が「たつきんさん」に重ね合わせてきたイメージそのものだった

ムへの過度な傾斜があることだった。

当時の行内報に同部の職場紹介が載っている。

それによると、部内には融資先との渉外・契約を担当する「業務推進」と、その安全性をチェックする「審査」の各グループが同居している。

業務推進八人に対して審査はわずか二人。行内報は審査は進と審査の各担当が同居する「業務本部制」が流行した。拓銀も八四年に審査部の旗を八八分の仕事量を一人で短時降ろした。

が右手で融資起案を書き、左手で判子を押すようなもの(元総合開発部員)。人は苦々しげに振り返った。審査機能は極めて軽視されていた。

部内で決められた融資案件は担当常務の海道が副頭取、頭取の決裁に上げるが、ほぼノーチェックで通過した、という。安易な融資がまかり通り、一他の部からは何が行われているのか、さっぱり分らない(幹部)という密室化も進んでいく。

八〇年代前半、銀行業界では融資業務の効率化のため審査部の廃止が相次ぎ、業務推進と審査の各担当が同居する「業務本部制」が流行した。拓銀も八四年に審査部の旗を八八分の仕事量を一人で短時降ろした。

だが、危機管理上の反省点も根強く、九〇年前後にも気づかず、札幌に一本化されたインキュベーター路線の動きが芽生えは、ますます熱く燃え上がることになる。

景気下降読めず暴走

開発部の「有名銘柄」となる中から釣り上げられた。企業は、こうして拓銀幹部の眼鏡にかない、バブルの波の

間にも確に判断するといえる。拓銀は九〇年十月の組織改革で審査部を復活させたが、実際には「同じ人間ら、一方で総合開発部にこの

敬称略、肩書は当時(拓銀問題取材班)

前年末に三万九千円の最高値をつけた同株は、その後急落、わずか九カ月間で半分になった。だれもが「バブル崩壊」を実感していた。

同日の札幌、冷たい雨が降っていた。だが、拓銀本店の四階の一室は真様な熱気を放っていた。そこには、この日発足した新部署の面々十八人が顔をそろえた。総合開発

部の一角には担当役員個人の室があった。そこに座ったのは海道弘司常務。十億円以上の新規融資を取れ、一億二億は支店に任せろ。前任の本部長時代の派手な癖(けき)は有名だった。積極的、行動的な性格は、そのまま新しい北海道エスター…。後に総合